

# 小説の可能性を探求する 桜庭一樹の秘めた闘志

本を出すたびに新しい試みを行い、次々と自分の可能性を切り開いていく作家・桜庭一樹さん。その小説に対する真摯で貪欲な姿勢の源は、どこにあるのだろうか。



## 文学少女から直木賞作家へ 読者に届く場所を探し続けて

いま、編集者が最も仕事を依頼したい旬の作家の一人である桜庭一樹さん。直木賞受賞後の取材攻勢が一段落した3月下旬、文藝春秋の応接

室で桜庭さんに対面した。指には大粒のイチゴの指輪。両耳には小粒のイチゴのピアスが揺れる。赤色が映える大きめのニットにすっぽり身をつつんだ桜庭さんは、少女のようなかわいらしさを漂わせた女性だった。

作家・桜庭一樹の名前を一気に広めたのは、故郷鳥取の架空の村を舞台に、女三代にわたる血族の60年を描いた『赤朽葉家の伝説』。2006年に刊行されたこの作品は、日本推理作家協会賞を受賞するとともに、直木賞候補にもなった。そして2008年、近親相姦というタブーともいえるテーマに挑んだ『私の思』では直木賞を受賞。今やその実力は誰もが認めるところとなっている。

桜庭さんが小説家を目指したのは、小学校4年生のころ。子ども向けの世界文学全集をむさぼるように読んでいた本好きの少女は、友人が小説を書いていたのをまねて自分でも書き始めた。

中学生になると、好きな本の好きなシーンを、ひたすらノートに書き写していた桜庭さん。ヘルマン・ヘッセの『デミアン』や『知と愛』、サマセット・モームの『雨』などが特に気に入っていたという。

『好きなシーンを書き写しているうちに、その文章の良さがだんだんわかってくるんです。書き写したものを読み返してみたり、好きなシーンばかりを集めて編集してみたり……。そうやって反復練習を繰り返しているうちに、自然に文章が身につくようになっていたのだと思います』。

その後、東京の大学へ進学し、作家を目指した。

『最初のころは、すごくいいワンシーンを書けても、一篇の小説としては、なかなか完成させることができませんでした。それで20代後半ごろから、見事なプロットのミステリーがあると、全体のプロットを図形化して紙に書いてみることを始めたんです。それをさうと眺めて、『きれいな構成だな』と思ったり、自分が小説を書く際の参考になりました。全体のプロットを考えるようになってからやると、長編が書けるようになりました』。

27歳の時、『夜空に、満天の星』

で第1回ファミ通エンタテインメント大賞の小説部門で佳作に入選。念願の作家に。しかし、人気や売上部数が重視される少女向け小説の世界では、書きたい小説と売れる小説のギャップに悩むことも多かったという。

『大人向けの小説と違って、少女少女向けの作品を書くには、色々な約束事があるんです。エンタテインメントとして楽しく読めることが求められているんですが、私の場合はラストが暗すぎたり、人間を生々しく書きすぎてしまったんです。中高生の読者にわかりやすいよう、単純な悪役を登場させようと思っても、その人の背後を描きすぎて、逆にその悪役のほうが目白くなってしまいうこともよくありました』。

32歳の時、エンタテインメント性を意識して書いた『POSSICK』が初めて重版に。そして、その直後に書いた『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』という作品が、桜庭さんの作家人生を大きく変えることになる。

『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』は、すごく描きたかったけれど『POSSICK』には収まりきらなかった、暗くて残酷なモチーフを使っただけで、衝動的に書いた作品ですが、発売

後の初速があまり良くなく、少女少女向けと同じ路線の小説を出していくのは難しいという話になってしまいました。とても残念だったのですが、発売から数日経ったある日、飲み会で隣り合った東京創元社の編集さんが偶然その作品を読んでくれて、『うちで書いてみませんか』と声をかけてくださったんです』。

2005年、東京創元社から『少女には向かない職業』が刊行されると、その確かな筆致が幅広い読者と業界内で高く評価され、数々の執筆依頼が舞い込むようになった。

『少女少女向けに出して、なかなか売れなかったタイプの題材の本を、大人向けに出したら売れたんです。それまで、描いてはいけないと思っていたテーマに、挑戦しても大丈夫だと思えるようになって、すごく楽になりました。自分の小説がたくさんの読者に届く場所を、ようやく見つけられた気がします』。

## 読書家の編集者も脱帽 無類の本好き作家

今も昔も、ひたすら本を読むようにしているという桜庭さん。「本を読まない」と言葉が減って、書けなく